別紙２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：　鈴木　貴宇

論文題目

〈サラリーマン〉の文化史

近現代日本社会における安定への欲望をめぐる考察

鈴木貴宇氏の博士論文（論文博士）『〈サラリーマン〉の文化史　近現代日本社会における安定への欲望をめぐる考察』は、近現代日本の文学作品の中に描かれた〈サラリーマン〉像の分析を通して、それぞれの時代における社会状況の特質を明らかにした。

序章では〈サラリーマン〉という用語が、そのように名指される社会階層と共にどのように生成されたかを明らかにすることによって、本論文のアプローチの方法としての「文化史」の有効性を提示している。

第一章では、一八八〇年代から一九一〇年代までを射程として、〈サラリーマン〉という用語が登場する前の近代化と資本主義体制の初期段階における、学歴エリートとしての官吏や実業家の活字メディアにおける表象の在り方を記述し、近代小説の嚆矢とされた、二葉亭四迷『浮雲』の分析に至っている。

第二章では、ヨーロッパでの第一次世界大戦による、日本の軍需景気の中における株式会社の増加と、東京駅の開業（一九一四年）に象徴される現象として、郊外の「文化住宅」から丸の内の会社に通勤する男性たちが、〈サラリーマン〉のプロトタイプを形成したことが明らかにされていく。またこの時から、活字メディアに「サラリーマン」という言葉が登場する。「文化住宅」に憧れる若いサラリーマン夫婦を描いた岸田國士の戯曲『紙風船』の分析を、本章全体の導線にしている。

一九二三年の関東大震災と経済不況の中で、階級闘争が激化する昭和初頭のサラリーマン表象を「モダン都市東京」の大衆文化の爛熟と共に捉えようとしたのが第三章である。浅原六朗に代表されるサラリーマンを主人公とした小説の分析を通して、日本の軍国主義化と階級的なイデオロギー闘争の中の思想動向を活写している。

第四章では、敗戦から朝鮮戦争特需の時期における、サラリーマン小説というジャンルを確立した源氏鶏太の『三等重役』において、登場する男性たちが、戦争の時代とどのように異なるのかを分析し、「専業主婦とサラリーマンの夫」という核家族の在り方を、会社が形成していった過程を明らかにしている。あわせて菊田一夫原作のラジオドラマ『君の名は』という、アメリカ軍の占領が終結する年に発表された作品を通じて、戦後日本におけるサラリーマンの社会位置について論じている。

第五章では、サラリーマンの上層であるホワイトカラー層の労働運動の一つの在り方と

して、銀行における労働組合活動とその文化運動を分析している。戦後の民主化政策の中で日本の全ての産業において組合活動が組織され活況を呈していく過程が、豊富な史料を通して明らかにされている。銀行という資本主義経済の中核に位置する特別な企業体で展開された文化運動の中で、ホワイトカラーの人々が、「組織」と「個」のかかわりをめぐって、自らのアイデンティティを問い直す過程が、詳細な資料の分析をふまえて、精緻に叙述されている。この章では、戦後文化運動についての最新の学界の研究成果が十分に生かされていることが示されている。

終章では、山口瞳の直木賞受賞作『江分利満氏の優雅な生活』（一九六二年）の作品分析を中心にしながら、高度経済成長期のサラリーマンの生活の実情を通して、日本の戦後からの離脱の在り方を分析している。多くのサラリーマンが、「未来への投資」として子どもと家族に安定を与えるため、賃貸団地生活からマイホーム取得へと欲望を転換していく社会の意識構造を、山口の小説の細部を精緻に分析することで明らかにしている。

審査の中では、時代と作品分析との関係が、文学テクストそのものから十分なされていない、戦後についてはサラリーマンの上層部に対象が限定されてしまっている、短期間の書き直しで改善されたところも多くあるが、初稿の段階で論文を貫いていた、「サラリーマン」という階層への「鎖魂歌」的叙述が結果として弱くなってしまったことが残念だ、という指摘もなされた。

しかし「サラリーマン」の文化的表象を、日本の近代社会の通史と重ねて分析することによって、男性給与生活者の近代日本社会における位置、近代家族の日本的特殊性、戦後日本社会における企業内人間関係の諸問題など、これまでの文学研究では十分踏み込むことの出来なかった領域を、本論文が明らかにしたことについて、審査員のすべてから高い評価がなされた。その意味ではすぐれた文化史研究、カルチュラルスタディーズの独自な成果を提示しており、文学だけでなく社会学や歴史学、精神分析とも応答しうる研究として認められた。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するのにふさわしいものとして認定する。